

学 位 論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

1. 申請者氏名	谷村 さくら
2. 審査委員	主 査：（兵庫教育大学） 浅 海 真 弓 副主査：（兵庫教育大学） 大 西 久 委 員：（岐阜大学） 山 本 政 幸 委 員：（岡山大学） 清 田 哲 男 委 員：（鳴門教育大学） 家 崎 萌
3. 論文題目	美術教育における陶芸学習についての研究 ―工程のつながりと省察に着目して―
4. 審査結果の要旨	教科教育実践学専攻芸術系教育連合講座 谷村 さくら氏 から申請のあった学位論文について、兵庫教育大学学位規則第16条に基づき、下記のとおり審査を行った。 論文審査日時：令和年8月7日（金）14時30分～15時30分 場 所：オンライン（Zoom） 1. 学位論文の構成と概要 〈本論文の構成〉 序章 研究の背景と目的 第1節 研究の背景/ 第2節 先行研究の検討/第3節 目的と方法 第1章 我が国における陶芸の歴史 第1節 日常生活に根ざした陶芸/第2節 近代化と産業としての陶芸/ 第3節 芸術としての陶芸の成立/第4節 戦後の展開と表現の多様化/ 第5節 現代社会における陶芸と生活 第2章 美術教育における陶芸学習の位置付け 第1節 手工科における粘土教材/第2節 芸能科工作における陶芸学習 第3節 戦後の学習指導要領における陶芸学習/第4節 まとめ・陶芸学習の変遷 第3章 教科書題材にみる陶芸学習の変遷 第1節 戦前・戦中における粘土題材の展開/第2節 戦後改革期における陶芸題材の積極的採用/ 第3節 学習指導要領告示以降の陶芸学習題材の変容/ 第4節 陶芸の歴史及び学習指導要領・教科書題材の変遷との比較 第4章 陶芸学習における材料体験と発達段階 第1節 粘土の材料特性を体験的に捉える授業実践/第2節 発達段階の構想/ 第3節 まとめ 第5章 工程経験の差異と鑑賞時省察の生起―図画工作での実践より 第1節 授業実践と考察・分析方法について/第2節 児童の工程別評価と制作過程の特徴/ 第3節 工程経験数による比較/第4節 施釉体験の違いと完成後評価/ 第5節 鑑賞環境による省察の比較/第6節 本章の結論 第6章 省察の継続と使用による学び―美術科での実践より 第1節 陶芸学習経験の有無と次の制作への影響/第2節 使用後の省察による学び 終章 まとめと今後の展望 第1節 研究の成果/第2節 本研究の課題と今後の展望

〈本論の概論〉

本研究は、図画工作科および美術科における陶芸学習の教育的意義について、「工程のつながり」と「省察」に着目して明らかにすることを目的とする。陶芸学習は、成形、乾燥、施釉、焼成など、複数の工程を経て作品が完成する学習である。制作の過程で、児童生徒は粘土の可塑性や水分量による状態の変化を身体的に捉えるとともに、乾燥や焼成のように、自らの手を離れたところで生じる変化も経験する。このような陶芸学習には、複数の工程のつながりを見通して制作するとともに、完成した作品を手がかりとして制作過程を振り返るという特徴がある。そこで本研究では、材料との関わり、工程経験、完成後の鑑賞、作品の使用に着目し、それらが省察と次の行為につながる過程を検討した。

序章では、陶芸学習を取り巻く社会的・教育的背景を整理するとともに、関連する先行研究を検討し、本研究の目的と方法を示した。特に、デジタル化やAIの発展によって効率的に結果を得ることが可能となった現代において、素材に直接触れ、複数の工程を経ながら結果を受け止め、その原因を考え、次の行為へつなげる陶芸学習の意義に着目した。

第1章では、我が国における陶芸の歴史を、日常生活に根ざした陶芸、近代化と産業としての陶芸、芸術としての陶芸の成立、戦後の展開と表現の多様化、現代社会における陶芸と生活という観点から整理した。陶芸は、生活に必要な器などの実用品として発展する一方、産業化や近代化を経て、工芸および芸術表現としての領域を広げてきた。この歴史的展開から、陶芸が「表現すること」と「生活すること」の双方に関わる営みであることを捉えた。

第2章では、美術教育における陶芸学習の位置付けについて、手工科における粘土教材から、戦前の芸能科工作、戦後の学習指導要領における陶芸学習までを整理した。その結果、陶芸学習は、教育制度や社会的要請の変化に応じてその位置付けや内容を変化させながらも、材料に直接関わり、手を働かせて形をつくる学習として継続的に取り入れられてきたことを明らかにした。

第3章では、教科書に掲載された陶芸題材に着目し、戦前・戦中から戦後、さらに学習指導要領告示以降に至る題材の変遷を整理した。そして、第1章の陶芸そのものの歴史的展開と、第2章の美術教育における陶芸学習の位置付けとを比較することにより、学校教育における陶芸題材が、社会における陶芸の変化や教育的要請と関わりながら展開してきたことを考察した。これら第1～3章の検討を通して、陶芸の社会的・文化的変化と学校教育における陶芸学習の変遷との関係を捉え、今日の陶芸学習の在り方を検討するための基盤を示した。

第4章では、陶芸学習の基盤となる材料との関わりと発達段階に着目した。小学校低学年と中学年の児童を対象に、粘土の水分量による状態変化を体験する授業実践を行い、児童が粘土の特性を触覚的・身体的に捉えていく過程を分析した。その成果を踏まえ、陶芸の複数の工程を見通しながら制作する学習と発達段階との関係を検討した。その結果、材料体験を造形活動へと発展させるためには一定の発達段階が必要であることが示され、本研究の実践研究の対象として中学年以降の児童を位置付けた。

第5章では、小学校高学年の図画工作科における器づくりを対象として、工程経験の違いと完成後の省察との関係を検討した。児童が経験する工程数や施釉工程の有無・内容を変え、それらが制作過程に対する評価や完成後の省察に及ぼす影響を分析するとともに、工程経験が限定される場合の鑑賞環境や方法についても検討した。その結果、複数の工程を経験することで工程相互のつながりを捉えやすくなり、完成後には制作過程に関する具体的な改善点が生じることが明らかになった。また、工程経験が限定される場合でも、鑑賞環境や方法を工夫することで、制作過程への振り返りが促されることが示された。

第6章では、中学校美術科における陶芸学習を対象として、省察が次の制作や実際の使用へどのようなつながるのかを検討した。まず、陶芸学習の経験の有無が、その後の制作にどのような影響を及ぼすのかを分析した。さらに、完成した陶芸作品を実際に使用する活動を取り入れ、使用後の省察において、生徒が作品の見た目だけでなく、用途や機能、使いやすさなどの観点から制作結果を捉え直す過程を分析した。その結果、陶芸学習の経験の有無が、生徒が制作の見通しをもって活動することに影響を及ぼすことが示された。さらに、陶芸作品を実際に使用することで、制作時には気付きにくかった問題や改善点が具体化され、完成に至った原因を考えながら、次の制作に向けた改善の構想につながることを示された。

以上の各章の検討から、本研究では、陶芸学習を単に粘土を用いて作品を完成させる表現活動としてではなく、材料に触れ、複数の工程を経験し、工程のつながりを捉え、完成した結果を手がかりとして制作過程を省察し、その省察を次の行為へつなげる学習として捉えることを示した。こうした「見通しをもってつくる—結果を受け止める—過程を振り返る—原因を考える—次の行為を構想する」という循環的な学習過程に、陶芸学習の今日的な教育的意義がある。素材や時間、工程と直接関わりながら、予測と結果とのずれを受け止め、そこから次の行為を構想するという、結果に至る過程そのものを学習の対象とする点に、陶芸学習の固有の教育的意義があることが本研究から示された。

2. 審査経過

(1) 研究の目的と論文構成の整合性について

本研究は、図画工作科および美術科における陶芸学習の教育的意義について、「工程のつながり」と「省察」に着目して明らかにすることを目的としている。論文では、まず序章において、筆者の経験や調査を基に陶芸学習をめぐる問題の所在を明らかにするとともに、本研究の目的を設定する意義とその根拠を示している。次に、陶芸教育および図画工作科・美術科における学習過程に関する先行研究を俯瞰・分類し、その到達点と課題を整理している。その上で、従来の研究において十分に検討されていない「工程のつながり」と「省察」という観点の重要性を示し、これらの観点から陶芸学習の教育的意義を検討するため、①「陶芸の各工程のつながりを体験的に理解することにより、児童生徒は完成までの変化を予想し、見通しを持って活動に取り組む力を形成する」、②「完成後の鑑賞を通して、自らの制作工程を振り返り、結果の原因や改善点を見出す省察の過程が、主体的に問題解決に向かう力につながる」という二つの仮説を設定し、研究方法を示している。

第1章から第3章では、文献調査により、我が国における陶芸の歴史、美術教育における陶芸学習の位置付け、教科書題材にみる陶芸学習の変遷について検討している。これらの調査を通じて、陶芸の歴史的展開、美術教育における位置付け、教科書における題材の変化が相互に関連しながら、それぞれの時代の社会的・教育的要請に応じて、陶芸に求められる教育的意義が変化してきたことを明らかにしている。さらに、今日の社会環境を生きる子どもたちに求められる資質・能力を踏まえ、従来とは異なる陶芸学習の在り方を検討する必要性を示している。

第4章では、異なる二つの学年を対象として、粘土の材料特性を体験的に捉える授業実践を行い、「工程のつながり」と「省察」を取り入れた陶芸学習に適した児童の発達段階について検討している。児童の活動状況を丁寧に観察した結果、材料体験が単なる触覚的な遊びにとどまる場合と、材料への関わりが造形への欲求につながる場合とが確認され、発達段階としては中・高学年以降の児童に適した活動であることを明らかにしている。この成果は、その後の実践研究の対象及学習内容を設定する根拠となっている。

第5章では、第4章の成果を踏まえ、小学校高学年以降の児童を対象として、体験する工程数を変えた8つの実践を行い、延べ約750名の児童を対象に、鑑賞時に生起する省察について質的・量的な分析を行っている。その結果、体験する工程数が、その後の省察の質に関係することを明らかにしている。また、制作中に児童が「直したい」と感じた点についてのアンケート調査から、完成作品に対する満足度が必ずしも学習の質と一致するものではないことを示している。すなわち、複数の工程を実際に経験することによって、「あの時、もっとこうしておけばよかった」という気づきや反省が促され、制作過程そのものを振り返る省察が生じることを明らかにしている。

第6章では、陶芸体験の有無が次の作陶活動にどのような影響を及ぼすのかについて実践研究を行い、第5章で確認された気づきや反省が、その後の活動にどのように生かされるのかを分析している。その結果、陶芸の経験値が高く、多くの工程を体験した児童ほど、制作時により多くの点に注意を向けながら活動していることを明らかにしている。さらに、中学生を対象として植木鉢製作の実践研究を行い、完成直後の鑑賞と、実際に使用した後の鑑賞とを比較している。その結果、使用後の鑑賞では、完成直後には捉えられなかった使用上の問題や改善点が見出され、それらを契機として、自らの制作工程を振り返る省察がより深まることを明らかにしている。

以上のように、本研究では、筆者が指導者及び制作者として陶芸学習に関わる中で得た問題意識を、先行研究の検討によって理論的に位置付け、その問題意識から設定した「工程のつながり」と「省察」という二つの観点を、陶芸の歴史及び学校教育における陶芸学習の変遷の中に位置付けている。さらに、第4章から第6章において、対象の発達段階、工程数、次の制作活動、使用後の鑑賞という異なる条件を設定した複数の実践研究を段階的に積み重ねることで、陶芸学習における工程の体験と省察との関係を実証的に検討している。このように、本研究は、陶芸学習の歴史的・教育的な位置付けの検討から、学習内容・対象の設定、工程の体験と省察に関する実践研究、さらに省察を次の制作活動へつなげる過程の検討へと研究を段階的に展開しており、研究目的、仮説、各章における研究内容が相互に関連している。したがって、研究目的と論文構成はよく整合しており、論文全体として一貫性のある構成となっていると評価できる。

(2) 研究の独創性について

これまで、陶芸学習については、材料経験や造形表現、生活に必要なものを自らの手で制作することの教育的価値や意義について、多くの研究が蓄積されてきた。一方、本研究は、陶芸学習における「工程のつながり」と「省察」に着目し、工程経験の違いが完成後の省察にどのように関係するのかを、複数の実践を通して検討した点に独創性と今日的意義を有している。

特に、第5章では、工程数や施釉工程の有無・内容等を変えた8つの実践を行い、延べ約750名の児

童を対象として、工程経験と完成後の省察との関係を質的・量的に分析した。その結果、複数の工程を経験することが、工程相互のつながりの理解や、完成後の具体的な気付き・改善点の生成に関係することが示された。このように、陶芸における工程を単なる制作上の手順ではなく、省察を生起させる学習上の要因として捉え、その影響を実践的に検討した点に、本研究の重要な独創性が認められる。

さらに、第6章では、そこで生じた省察が次の制作活動や作品の使用を通してどのように発展するのかを検討した。これにより、工程経験―省察一次の行為へと学習が展開する過程を捉えた点にも、本研究の独自性が認められる。

(3) 今後の発展性について

本研究では、「見通しをもってつくる―結果を受け止める―過程を振り返る―原因を考える―一次の行為を構想する」という循環的な学習過程に、陶芸学習の今日的な教育的意義があることを明らかにした。一方で、陶芸には、成形や施釉のように学習者が直接関与できる工程と、乾燥や焼成のように直接関与することのできない工程とが連続するという固有の特徴がある。本研究では、このような工程の違いが、学習者の予測や判断、結果の受け止め方、省察、次の行為の構想にどのように作用するのかについては、十分に明らかにするまでには至っていない。

今後は、学習者が直接関与できる工程と、結果を待つ工程との間で、予測、判断、結果の受け止め、振り返り、次の行為の構想がどのように生起し、変化するのかを明らかにすることが求められる。特に、乾燥や焼成のような「待つ時間」が、見通しをもって行為することや、結果を省察して次の行為を構想することにどのような意味をもつのかを検討することで、陶芸に固有の学習過程をより具体的に捉えることができると考えられる。

(4) 学校教育の実践への貢献について

本研究では、図画工作科及び美術科の授業において、児童生徒の発達段階や各授業の目的・内容に応じた陶芸学習を実践し、その学習過程と教育的効果を検証した。これにより、材料との関わり、工程経験、完成後の鑑賞、作品の使用といった陶芸学習の各場面において、児童生徒の省察を促すための学習の在り方を示している。特に、工程数や工程経験の違い、鑑賞の方法、作品を実際に使用する経験などを条件として設定した実践結果は、学校現場で陶芸学習を構想する際の具体的な手掛かりとなる。

また、陶芸窯等の設備や授業時間に制約がある学校においても、陶芸学習の全工程を経験することだけを前提とせず、工程の一部を体験したり、鑑賞の場や方法を工夫したりすることで、児童生徒に「工程のつながり」を捉えさせ、制作過程への省察を促す可能性を示した。このことは、陶芸学習の実施条件が整わない学校においても、その教育的価値を生かすための授業構成を検討する上で有用な知見となる。

このようなことから、本研究は、学校現場の実情に応じた陶芸学習の構成に具体的な示唆を与えるものであり、学校教育への実践的な貢献を有すると評価できる。

3. 審査結果

以上により、本審査委員会は 谷村 さくら 氏 の提出した学位論文が博士（学校教育学）の学位を授与するのにふさわしい内容であると判断し、全員一致で合格とした。